

龍谷大学歴史学研究会会誌

鏡

第73号

龍谷大学歴史学研究会



使用画像：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AF%9B%E5%88%A9%E8%BC%9D%E5%85%83>

〈刊行にあたり〉

このサークルは1970年の創始から本年で50年を迎えます。この50年間において多くのサークル紙が発行されましたが、その多くは紙媒体のみでデータとしては残存していません。2020年という新しい時代の幕開けと同時に、このサークルでも紙媒体だけではなく、PDF化したデータを残していくとともに、公に公開するという取り組みを開始しました。

このサークル紙はあくまで大学生が自分の好きなものを学び、研究したものを発揮しているものです。そのため多くの研究漏れや認識違いがある可能性があります。もしそのような点に気付いた方は「歴史学研究会」のTwitterなどで指摘していただければ幸いです。

本年も歴史学研究会をよろしく願いいたします。

歴史学研究会 会長 奥 武輝

〈目次〉

1 頁—目次

- ① 2頁—4頁 『京都府舞鶴市における近現代の文化財について』
- ② 5頁—7頁 『奥州藤原氏の金と貿易』
- ③ 8頁—10頁 『関ヶ原の戦いにおける毛利氏』
- ④ 11頁—14頁 『応天門の変における藤原北家陰謀説への疑問視』
- ⑤ 15頁—18頁 『崇徳院怨霊』
- ⑥ 29頁—26頁 『大久保利通—西郷隆盛との関係と人柄について—』
- ⑦ 27頁—30頁 『吉田松陰が見た日本と世界』
- ⑧ 31頁—33頁 『狄仁傑と則天武后』
- ⑨ 34頁—37頁 『積層する都市』
- ⑩ 38頁—41頁 『淳仁廃帝時の女帝の意識の分析』

京都府舞鶴市における近現代の文化財について

はじめに

京都府舞鶴市は海上自衛隊舞鶴基地が拠点を構える地であり、それ故に筆者自身も何度か訪れたことのある街である。今回は赤れんがで造られた倉庫がどのように保存され、今日活用されているのか気になったこともあり、基礎演で発表した研究報告に加筆した上で、近現代の舞鶴について述べていきたい。なお舞鶴市は西と東で特性が異なるが、今回は東舞鶴に焦点を当てた。

1.舞鶴市の概要と交通アクセス

舞鶴市は京都府の北部に位置し、京都から特急で約1時間40分、大阪から約2時間20分である。また、自動車を使うと中国自動車道吉川JCTから舞鶴若狭自動車道(舞若道)を經由し約1時間40分と、交通機関は整備されているといえるだろう。筆者は大阪市内から自動車を利用したが、休憩を挟みつつ舞若道を經由し3時間ほどであった。

2.北吸赤れんが倉庫群

明治時代、日本の近代化による軍備の増強に伴って設置されたのが舞鶴鎮守府であり、今日北吸赤れんが倉庫群と呼ばれる建築物は、明治～大正期にかけて主に倉庫として建設されたものである。現在、舞鶴には赤れんがの建造物が約120件確認されているといい(舞鶴市2018, p. 94)、その中で北吸赤れんが倉庫群を構成しているのは、舞鶴赤れんがパーク1～5号棟や旧舞鶴鎮守府軍需部倉庫3棟(現・文部科学省所管倉庫)など計12棟である(舞鶴市2018, p. 95)。この内、舞鶴赤れんがパークを構成している建築物の詳細を表1に示す。

赤れんが倉庫群は約1世紀前から存在していたが、上杉氏は「赤れんが」が舞鶴の象徴となることを舞鶴市民が「発見」し、実際に活用し始めるようになったのは、元号が平成に変わってからのことにすぎないと述べている(上杉2011, p. 2)。実際、舞鶴において「赤れんが」が「発見」されたのは1980年代末だったようである(上杉2011, p. 6)。1989年に舞鶴市所有の赤煉瓦倉庫1棟のライトアップが行われ(上杉2011, p. 13)、以後保存・活用運動が本格化し、1993年の赤れんが博物館開館に始まる赤れんがパークとしての活用に繋がるきっかけとなったと考えることも可能である。なお、赤れんが博物館の建設は、放置されていた旧海軍施設の倉庫(旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫)を再生しようという話が市のなかで持ち上がり、国内国外の赤れんがを広く収集展示する博物館としようというアイデアによるものだった。(西村1995, p. 98)

3.戦後の舞鶴

第二次世界大戦で日本が敗戦すると、海外に残された多くの日本人が日本へ引き揚げることとなった。全国各地で引揚者を受け入れたようであるが、1945年から1958年までの13年間に渡って受け入

れていたのは舞鶴だけだったようである。1988年に開館した舞鶴引揚記念館では引揚者の記憶やシベリア抑留者たちの記録資料などを展示しており、その一部は2015年10月10日にユネスコ世界記憶遺産に登録されている。また、1994年に復元された平引揚棧橋は、引き揚げの記憶を後世に継承する場となっているようである。

おわりに

舞鶴の赤れんが倉庫群は、活用され始めて30年程しか経っていないということが分かった。その上で現在の活用状況を見ると、20世紀に入ってから市民と行政が共に保存・活用に取り組んできたと考えられる。近年、舞鶴市は従来の「赤れんがモデル」から「舞鶴モデル」へと理念を転換しており、北吸地区での取り組みを市全域へ広げているということである。「赤れんが」の活用によって増えていったであろう観光客の数などを、今後、舞鶴地域に数多く伝わる歴史・文化財と共に見ていきたい。

参考文献

舞鶴市市民文化環境部地域づくり・文化スポーツ室文化振興課編集『舞鶴市歴史文化基本構想』舞鶴市 2018年

西村幸夫「町並みまちづくり最前線-6-京都府舞鶴市--軍港から赤レンガのまちへ」『地理』40(5) 古今書院 1995年

上杉和央「軍港都市と近代の文化遺産：舞鶴の「赤れんが」」『京都府立大学学術報告, 人文』63巻 2011年 (<http://id.nii.ac.jp/1122/00004574/>)

名称	活用状況	開館年	文化財指定
赤れんが1号棟	舞鶴市立赤れんが博物館	平成5年(1993)	国指定文化財
赤れんが2号棟(図1)	舞鶴市政記念館 (喫茶店)	平成6年(1994)	国指定文化財
赤れんが3号棟	まいづる知恵蔵 (展示スペース、土産店)	平成19年(2007)	国指定文化財
赤れんが4号棟	赤れんが工房 (多目的スペース)	平成24年(2012)	国指定文化財
赤れんが5号棟(図2)	赤れんがイベントホール (赤れんがカフェ)	平成24年(2012)	国指定文化財附
文部科学省所管倉庫	非公開		国指定文化財

表1 赤れんがパークの構成(舞鶴市2018, pp.94-95、上杉2011, pp.8-9、現地案内マップを元に作成)

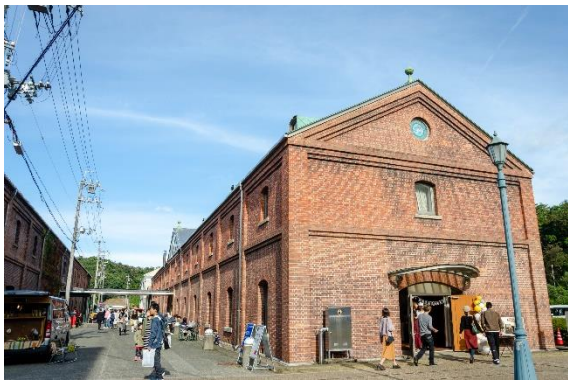


図1 2号棟(筆者撮影)



図2 5号棟(筆者撮影)

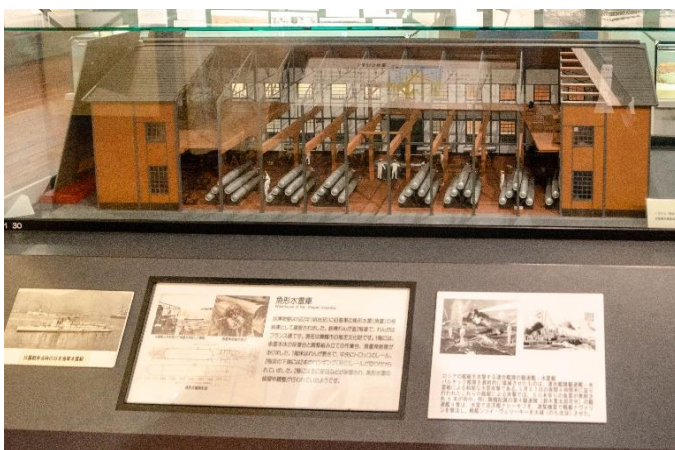


図3 赤れんが1号棟の魚形水雷庫(筆者撮影)

奥州藤原氏と金・貿易

はじめに

奥州藤原氏とは、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけてのおよそ100年間、陸奥国平泉を中心に東北地方一帯に勢力を張ったものである。後年に松尾芭蕉が詠んだ俳句や中尊寺金色堂、源義経との関係、そして奥州合戦などがよく知られているところであろう。今回は奥州藤原氏と金、水運などについて述べていきたいと思う。

1. 奥州藤原氏と金

日本で最初に金が発見されたのは『続日本記』によると奈良の大仏の鑄造が開始されて二年後の天平二十一年（749年）の事とされる。産金地は陸奥國小田郡（現在の宮城県遠田郡涌谷町黄金迫の黄金山神社付近）とされている。

奥州藤原氏は領内を流れる北上川流域の気仙、本吉、東磐井（現在の宮城県北部から岩手県にかけて）を主な産金地とし繁栄のための財源とした。金色堂は代表的なものであるが他には宋の皇帝に金10万5000両の砂金を献じ一切経を求めたことや東大寺の再建に3万両献じたことからその財力の大きさが推測できる。

2. 奥州藤原氏と貿易

(1) 水運

平泉に進出した清衡が「平泉館」を構えたのは関山の南、高館丘陵から南東にのびる台地上の柳之御所遺跡であった。発掘当初は3代目の秀衡の居館、政庁跡と考えられていたが、その後の発掘によって初代清衡からつづく4代の居館、政庁であった可能性が高くなった。おびただしい数の遺構が発掘され、平泉では群を抜く大量の出土品が発掘された。そのなかでも注目されたのは陶磁器であった。「かわらけ」は儀式や宴会で使用された使い捨ての食器であるが、約半数は京都の技法を模した薄手のかわらけで、残り半分は在地の伝統技法によるロクロかわらけであった。このことはこの場所で大規模な宴会が繰り返し行われていたことを表している。また、残りの出土陶磁器のうち8割以上が当時最新の国産陶器であった渥美・常滑窯製品で、残り1割が輸入中国陶磁器（大部分が白磁）であった。特別な高級品であった白磁が数多く出土しているのも特徴である。これらの陶磁器は日宋貿易の貿易港の博多から回路、北上川の水運を利用して直接平泉へ運ばれたと考えられる。

また白鳥館遺跡からも多くのことが見つかった。白鳥館遺跡は柳之御所遺跡から北東4キロほど離れたところ、北上川が平泉・衣川の盆地に入る位置にあり、現在までの発掘で大小の掘立柱建物群・工房群・道路などの大規模な交通・生産集落の遺構が見つまっている。この遺構は全国各地でみられた中世の川湊遺跡と同様の遺構をともなっていることから川湊跡であることが推測できる。

(2) 奥大道

また、平泉開府後から天仁元年頃までに本州の北端外浜（現外ヶ浜）まで奥州を縦貫する奥大道が通り北方の産物を都へと運ぶ役割を果たしていた。奥大道に沿った地域の拠点となる場所に「平泉セツト」や「かわらけ」や陶磁器が見つかっている。

(3) 蝦夷ヶ千島

北海道を含めた北方の島々のことであるが、しっかりと地理が把握されていたわけではない。基衡が毛越寺を建立した時に、金堂円隆寺の本尊の薬師如来像制作のため仏師雲慶に払った「功物」に記述があり、これを産地ごとに分けると

- ① 平泉周辺及び北奥の産物である円金 100 両、希婦細布 2000 端、糠部駿馬 50 疋
- ② 南奥の産物の安達絹 1000 疋、白布 3000 端、信夫毛字摺 1000 端
- ③ 北海道・サハリン地方の産物の鷺羽 100 尻、七間々中径ノ水豹皮（ゴマフアザラシの毛皮）60 余枚

の3つのグループに分けられる。このことから蝦夷ヶ千島との取引が行われていることがわかるだろう。奥大道の終点にある新田遺跡が陸奥湾岸の交易・貢納管理機関として最盛期を迎え勇払の厚真に和人の交易拠点が置かれたのであった。

さいごに

奥州藤原氏と金、貿易について述べてきたがもっと調べる必要があると感じた。馴染みのない地名が多く苦労したところもあった。衣川であったりにも触れることができなかつたし、何より水運であったりに対する知識が全然足りていないと感じた。もう一度できるのであればまたやりたいと思う。

参考文献

彌長芳子『日本の金』（東海大学出版会 2008）

斎藤利男『平泉 北方王国の夢』（講談社 2014）

入間田宣夫『藤原秀衡』（ミネルヴァ書房 2016）

高橋富雄『平泉の世紀 藤原清衡』（新・人と歴史 拡大版 07 清水書店 2017）

関ヶ原の戦いにおける毛利氏

はじめに

関ヶ原の戦いにおいて毛利輝元は西軍の総大将となったが、毛利軍は最後まで動くことなく終わった。毛利の武将達は一体どのようなことを考え、どのようなこと行動をしたのか考えていきたい。

1. 関ヶ原に至るまで

慶長5年(1600年)6月16日徳川家康は上杉景勝に謀反の疑いがあるとして、自らが総大将となり征討に向かった。この軍隊には徳川配下の武将はもちろん豊臣系の武将達も多く従軍した。これは、この会津追討が家康と景勝の私戦ではなく豊臣公儀の名の下に行われ、家康は豊臣秀頼の名代として進軍していたからである。

家康が大阪を離れると石田三成は家康打倒の準備に取り掛かる。大谷吉継と協力して反徳川陣営の拡大に尽力する。毛利輝元は三成と三成の行動に反対する長束正家・前田玄以・増田長盛三奉行の両方から上洛要請を受けて大坂に向かい大坂城に入城し西軍の総大将となる。毛利輝元の従兄弟である吉川広家はこの直前、家康の会津追討に従軍するために出雲の居城を出発していたが、明石で毛利の使者であり三成らとともに西軍の計画に加担していた安国寺恵瓊に会い毛利が家康打倒の企てをしていることを知る。吉川広家は輝元の出馬を止るため家臣を広島に送るもすでに輝元は出馬していたため、広家は黒田長政に対して、輝元の行動は全て安国寺恵瓊の策略によるものであると弁明の書状を送っている。

2. 関ヶ原とその後

西軍の様子を江戸で窺っていた家康は9月になり西上を開始し、9月15日関ヶ原で両軍の火蓋が切られた。石田三成はこれまでに輝元に対して何度か出陣要請を行っていたが輝元が大坂城を出ることはなかった。また、以前から東軍に内通していた吉川広家は関ヶ原に家康が着いた日に黒田長政を通じて東軍に和議を申し入れており、本多忠勝・井伊直政らから毛利の領国安堵などの起請文を送られている。

南宮山に陣した吉川広家・毛利秀元・安国寺恵瓊ら毛利軍は先陣であった吉川広家が動かなかったため最後まで動くことなく東軍が勝利した。

戦いに勝利した家康は毛利輝元がいる大坂城に向かった。輝元は本多忠勝・井伊直政・福島正則・黒田長政などの東軍武将に身の安全と所領安堵などを訴えこれらの武将が認め、輝元と家康の和談が成立し、輝元は大坂城を退城した。しかし、その後輝元の署名がされた文書などが続々と見つかると毛利領は没収となるも、広家の嘆願により広家に与えられた2ヶ国が毛利に与えられることとなり毛利家は存続することとなった。

3. 輝元の考え

従来では輝元は恵瓊に騙されて大阪に向かったとされていたが、光成準治氏は輝元が上坂要請を受け

てから大坂に着くまでがとても早いことから、恵瓊に説得されてではなく元から三成と関係が強くあらかじめ上坂の準備をしていた蓋然性が高いと述べている。また、光成氏は西軍が負けた時のために輝元から家臣の福原広俊に対して徳川派との密約が示唆されたか付度によって広俊が広家とともに東軍と密約を結んだのではないかと述べており、この根拠としてあげたのが、輝元が広家の離反情報を知っていた可能性が高い点と関ヶ原における毛利軍の先陣が広家ではなく恵瓊なのではないかという点である。光成氏は『吉川家文書』より関ヶ原の毛利軍の先陣は恵瓊であり、恵瓊が不戦に反対したという記述は反徳川決起の責任を恵瓊に負わせるための捏造だろうとしている。

一方、笠谷和比古氏は輝元の大坂入りが早かったことについては、三成・吉継とそれに反対する三奉行の両方から要請があったためであるとし、関ヶ原における毛利軍の不戦は先陣である広家が動かなかったことで、毛利秀元らは抜け駆けをすることはできず動けなかったと述べている。

毛利家家臣である益田元祥の輝元への書状で広家・秀元に東軍内通の疑いがあることが伝えられていたにもかかわらず対処を行なっていないことから輝元が東軍への内応を黙認していた可能性は高いと思う。また、益田元祥・熊谷元直・宍戸元次という毛利家の老臣が輝元の大坂城入城に際して広家同様に東軍の武将に対して輝元を弁明し、恵瓊の策によるものとしていることから恵瓊が西軍側であったのは確実だと思われる。そのため輝元から示唆がありそれに従ったとは考えにくい。南宮山に陣した毛利軍の秀元・広家・福原正俊・益田元祥・宍戸元次ら多くの有力家臣らが戦意が無いとすればたとえ恵瓊が戦おうとしても単独での行動は難しいだろう。

よって、輝元の示唆はなかったにしろ東軍への内通を止めることもなかったのではないかと考える。

4. 輝元の目的

輝元が西軍東軍どっちつかずの考えだったのであればなぜこの戦いに参加したのだろうか。

毛利軍は四国や九州北部にも侵攻しており、東軍に属した大名と戦っている。毛利氏による阿波占領は関ヶ原後まで続いており、また、九州においては門司城・小倉城を占領していた。この行動の意図として光成氏は領地拡大によって領国内の問題解決や瀬戸内海沿岸地域の制圧によって瀬戸内海制海権の獲得を図ったものであり、豊臣政権とは別の独立した領国を形成しようとしたと述べている。

秀吉の死後豊臣政権下では禁止されていた私婚を家康が行なったり、上杉氏が軍事力の強化を行なったりするなど明らかに体制の崩壊が進んでいた中で、輝元は戦国時代の再来を感じ取り次期政権の樹立までに勢力の拡大を図ったのではないだろうか。

おわりに

今回は各武将の人となりという面からは考えることができなかったため今後は人となりという面からも考えていきたい。また、今回は書状を中心に見たが、通説の元となった後世に書かれた軍記物や覚書も見たいと思う。

参考文献

- 笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』（2007）吉川弘文館
- 高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い』（2017）星雲社
- 谷口央 編『関ヶ原合戦の深層』（2014）高志書院
- 光成準治『毛利輝元』（2016）ミネルヴァ書房
- 旧参謀本部 編『関ヶ原の役』（2009）徳間書店
- 東京大学史料編纂所『大日本古文書 家わけ八ノ三』（1922）東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所『大日本古文書 家わけ九ノ一』（1925）東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所『大日本古文書 家わけ九ノ二』（1926）東京大学出版会

応天門の変における藤原北家陰謀説への疑問視

はじめに

応天門の変に関して、主に以下の説が挙げられている。

- ① 伴善男と藤原良相が結託し、左大臣源信を排斥しようとした。
- ② 藤原良房を中心とした藤原北家が伴善男・源信らを排斥しようとした。
- ③ 清和天皇の勅許により伴善男は流罪され、藤原北家は何の関わりもない。

まず、①については『吏部王記』などに基づいた説である。『吏部王記』は醍醐天皇第四皇子重明親王の日記であり、平安時代中期の政務や朝儀を理解する上での重要な史料である。しかし、この記述はあくまで応天門の変の事件処理についての内容を示しているものである。当時の政治状況を鑑みれば、伴善男らが恣意的に源信らを排斥しようとしたのではないと考えることができる。

今回は②の藤原北家の陰謀説に疑問を投げかけるとともに、応天門の変が平安時代初期の政変と異なる性質をもった事件であることを指摘したい。

疑問点

藤原北家陰謀説に対して疑問を投げかけるにあたり以下の三点を考察したい。

- ① 貞観八年（応天門の変発生年）の政治状況
- ② 伴善男と藤原北家との関係性
- ③ 伴氏没官地の位置づけ

①の貞観八年の政治状況では、応天門の変の首謀者とされた伴善男ら伴氏の政治的地位と左大臣源信ら嵯峨源氏の政治的地位を確認する。②の伴善男と藤原北家との関係性では、伴善男の官位や役職、藤原北家とのかかわりを中心として考察する。③の伴氏没官地の位置づけでは、応天門の変の事件処理のなかでの藤原北家の動向を考察する。

1. 貞観八年の政治状況

まず貞観八年の政治状況を『公卿補任』を用いて確認する。

[貞観八年丙戌]

太政大臣	従一位	藤原良房	〈六十三〉	八月十九日勅を重ね、天下の政者を撰行す。
左大臣	正二位	源信	〈五十七〉	
右大臣	正二位	藤原良相	〈五十〉	左大将。十二月十三日上表す。大将を停む。
大納言	正三位	平高棟	〈六十三〉	
		伴善男	〈五十六〉	閏三月十日夕。息男右衛門佐従五位上中庸を以て放火す。 応天門並びに左右の楼等を焼く。詔、死一等を降して遠流す。 九月廿三日伊豆国に配流す。同十年薨しぬ（六十）。《中略》。

世、伴大納言と云う。

権大納言 従三位 藤原氏宗〈五十七〉右大将。十二月十六日左大将を伝う。
中納言 正三位 源融 〈四十五〉按察使。
従三位 藤原基経〈三十一〉十二月八日任ず。(七人を超す)
参議 正四位下 源生 〈四十六〉
南淵年名〈六十〉
源多 〈三十六〉左衛門督。正月七日従三位。

～以下省略～

以上の『公卿補任』が示す政治状況から、伴氏に関しては伴善男のみが政治中枢に存在していることが分かる。また息男中庸は当時従五位上であり、もし伴善男を排斥したとしても藤原北家に対してメリットがあったとは到底考えられない。

一方注目すべきは、左大臣源信を筆頭に嵯峨源氏が政治的中枢に跋扈している点である。源信は嵯峨天皇の皇子であり、かつ嵯峨第一源氏であるから血統は申し分ない。さらに天長二年(825)には16歳で従四位上に直叙され、侍従・治部卿などを経て同八年に参議に列するなど、非常に若年の段階で政治的ポストに叙されている。これらの点から、当時の藤原北家の政敵は伴善男ではなく源信を筆頭とする嵯峨源氏であると考えることが適当であろう。

しかし応天門の変の事件の経過上、めだって藤原良房らは源信を追求することはない。むしろ良房は源信に嫌疑がかけられた際には、天皇に直訴し、信を弁明し擁護している。

さらに、良房が亡くなる直前の貞観十四年に源融が左大臣となっている。応天門の変の経過において摂政となった良房はその後も政治的中枢で政務を執り行っている。その藤原北家を中心にした政権において源融が左大臣になったのであるから、藤原良房ら藤原北家が嵯峨源氏を排斥しようとしていたとは考えられない。よって嵯峨源氏を政敵として排斥しようとする「藤原北家陰謀説」には疑問が残るだろう。

2. 伴善男と藤原北家との関係性

伴善男と藤原北家との関係性については佐伯有清氏が詳細な研究を行っているため参照していただきたい。伴善男は嘉祥三年(850)に良房の妹順子の中宮大夫に任命され、応天門の変発生の貞観八年までの16年間を側近として活動を共にしている。また斉衡二年(855)、従三位の時に藤原良房・良相らとともに『続日本後紀』を編纂している。この当時、善男は参議の一人にすぎないにも関わらず、国史の編纂職に任命されている点に注目する必要がある。斉衡二年段階では、すでに良房を中心とした政権が確立しているため、この編纂職任命は良房の意思があつてのことであろう。

また貞観元年(859)正三位になり、民部卿に補任される。民部卿は国家財政を司る官司である。また貞観元年は清和天皇践祚の年であり、いまだ九歳である。よって藤原良房を中心とした政権が公卿

の補任を行っていた。そのため、伴善男の民部卿補任もまた藤原良房らの意図によるものであるといえる。佐伯氏が「善男が良房と対立していたとする条件はなにもなく、かえって良房のがわにあって、惟仁親王を支持していたとみなすべきだろう。」（註 佐伯有清『伴善男』吉川弘文館、1970、148頁）と指摘するように、応天門の変が伴氏に対する陰謀であったという見解にも疑問が残る。

3. 伴氏没官地の位置づけ

応天門の変発生（閏三月十日）から9か月後の12月8日に伴善男の宅地・資材が没収される。『日本三代実録』貞観八年十二月八日条には「没入庶人伴善男宅地資材。付内蔵寮。佛像経論書籍付図書寮。」とあり、没収された宅地・資材は内蔵寮に預けられ、仏像や経論は図書寮に預けられたことがわかる。

この没官地の処理は藤原北家によるものであったと指摘されることが多い。しかし、考えてみれば、応天門の変の犯人として伴善男ら伴氏らが流罪になった以上、彼らの所領をそのままにしておくことはできない。この処理は藤原良房や基経らの意図というよりも、事件処理においてごく当然の処理であったといえる。

むしろ注目すべきは、『三代実録』貞観十七年十一月十五日条である。それには「庶人伴善男没官地一町在右京二條四坊。勅施天安寺。墾田八十四町。庄家六處在伊勢国。永充造京城道橋料。」とあり、貞観八年にはただ没収されただけの伴氏の宅地・資材が本格的に活用されていることがわかる。貞観十七年の左右大臣を『公卿補任』で確認すると、

左大臣 源融〈五十四〉皇太子を伝ふ / 右大臣 藤原基経〈四十〉左大将

とある。ここで注目すべきは左大臣源融が「皇太子を伝ふ」という点である。源融も嵯峨天皇の皇子であり、早いころから政務に携わっている。かつこの段階で「皇太子」の位を授けてもらっている点を考慮すれば、貞観十七年時点での政治的首班は源融であったといえる。付け加えて言えば、この次の年の貞観十八年に清和天皇がまだ壮年ながら天皇位を息子貞明に譲り、陽成天皇が即位する。陽成天皇の母は藤原長良の娘高子で、基経の同母妹である。そして陽成天皇即位にあたり藤原基経が右大臣ながら摂政となる。さらにそれとともに、源融への「皇太子を伝ふ」という宣旨が撤回される。これらの点から以下のことが推察される。貞観十七年段階の源融は皇太子の位を授けられ、政治的影響力は非常に大きなものであった。源融が万が一天皇となれば、藤原北家は外戚としての権限を失ってしまう。そのため藤原基経は清和天皇に接触し、譲位させ、いまだ幼年の陽成天皇を即位させた。そして天皇とほぼ同じ権限をもった摂政となることにより、源融への宣旨を廃止した。このことにより藤原北家の外戚としての立場が保たれた。

蛇足が長くなったが、以上のことから、伴氏没官地への本格的な処理は「源融政権」においてなされたと考えることができる。よってこの処理を「藤原北家陰謀説」とすぐさま結びつけることには疑問が残る。

まとめ

以上から、少なくとも応天門の変に関しては「藤原北家陰謀説」と切り離すことが必要ではないかと私は考える。従来の応天門の変に関する見解は、藤原北家陰謀説と結びつけることにより、平安時代初期の藤原北家による「他氏排斥」事件にカテゴライズしてきた。しかし、今正秀氏が指摘するように、天皇自身の権限を改めて研究することで、清和天皇を藤原良房の傀儡とみなしていた従来の研究を見直していく必要がある。すなわち、すべての事件を藤原北家による他氏排斥へとカテゴライズするのではなく、詳細な研究をすることで、後世の慣習や通例がいまだ存在しない平安時代初期のすがたを復元していくことが必要である。そのような平安時代初期の幼帝研究が次の課題である。

参考文献

佐伯有清『伴善男』吉川弘文館、1970

米田雄介『歴史文化ライブラリー 藤原摂関家の誕生—平安時代史の扉』吉川弘文館、2002

長野誉一『応天門炎上 伴大納言』勉誠出版、2004

今正秀『藤原良房—天皇制を安定に導いた摂関政治』山川出版社、2012

『「公卿補任」第一篇』吉川弘文館、1988

『増補新訂国史大系（普及版）—「日本三代実録」』吉川弘文館、1989

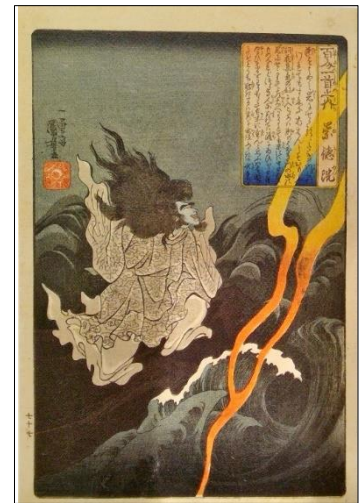
崇徳院怨霊

はじめに

崇徳院は百人一首の「瀬をはやみ 岩にせかるる滝川の われても末にあはむとぞ思ふ」という歌や、保元の乱で讃岐に流された上皇として知られている人物である。

しかし、菅原道真、平将門と共に日本三大怨霊として人々に恐れられていたことは、あまり知られていないのではないだろうか。崇徳院は、右の歌川国芳の絵のように「御髪も剃らせ給はず、生きながら天狗の形」になり、「日本国の大魔縁となりて天下を乱り国家を悩まさん」とする¹恐ろしい怨霊として描かれた。

文化だけでなく、政治にも大きな影響を与えた崇徳院怨霊について調べてみた。



百人一首之内 崇徳院

1. 崇徳院怨霊の出現

保元の乱で流された崇徳院が怨霊としてどう出現したのか、そしてどのように鎮魂されたのかを見ていきたい。

崇徳院は保元の乱からしばらくの間は怨霊として認識されていない。後白河院によって崇徳院は罪人として扱われた。天皇であったのにもかかわらず、朝廷には何の処置も取られず、国司によって葬礼が行われたのみであった。

崇徳院が亡くなってから十二年経った、安元二年(1176)には、たった三か月で、後白河院周辺の人物や、頼長と敵対した忠通に関連する人物が相次いで亡くなっている。²

さらに安元三年(1177)四月に京都で大火災が起こった。樋口富小路から出火し、京中で東は富小路まで、南は六条まで、西は朱雀の西まで、北は大内裏までことごとく焼失し、大極殿以下八省院はすべて焼失してしまい³、京中は死骸があちこちに転がるという悲惨な状況になった。この状況を右大臣九条兼実は、『玉葉』四月廿八日条⁴で、後白河院が、法令をあえて改めようとしないうえ、このような火災が起きたと後白河の失政を非難している。兼実は火災の予兆を火星が太微⁵に入るという陰陽道的解釈によって見て取ろうとしており、これを後白河の失政と結びつけている。内裏の火災は、一般的に祟りによるものと思われていたようであり、特に安元三年の火災の場合には、焼亡したのが大極殿であり、王権継承上極めて重要な場所であるため、火災が怨霊のためであるという認識はより一層先鋭

¹ 百人一首^{ひととびさし}一夕話(下) P109 012~14

² 表①参照

³ 地図を参照

⁴ 史料①『玉葉』参照

⁵ 太微垣(たいびえん)のこと、現在のしし座、おとめ座、かみのけ座付近を指す。

なものになったと思われる。大火災の後には各地で放火強盗が起きており、これらは、みな後白河院に「徳」がないため災異が起こったのだとみなされた。しかし、後白河院はこれらに具体的に対応する政治力を持ち合わせていなかったのだ。

そして、安元三年六月、鹿ヶ谷の陰謀が発覚し、後白河院の近臣が捕えられ、院の執政が停止されるという事件が起きた。これらの出来事が相次ぎ、後白河院は精神的に追い込まれていった。そのため、後白河院は崇徳院怨霊の存在を認めざるを得なかったのだ。

『愚昧記』安元三年五月九日条⁶には、左大臣^{つねむね}経宗は相次いで起こる事態が崇徳院と藤原頼長の祟りによるもので、それを鎮めるのは非常に重要なことであると右大臣兼実^{つねむね}に述べていると書かれている。その以後も繰り返して、両者の間で怨霊について議論されている。

それでは、怨霊の存在を語っていたのは誰であろうか。保元の乱で崇徳院側に与した人々の間で、崇徳院の復権、そして自らの復権を行うために崇徳院怨霊を語っていったのであった。そしてその時あたかも社会不安の時期にあり、崇徳院怨霊の受容する状況にあった。そのため、後白河院も、ひとたび怨霊の存在を信じると、立て続けに鎮魂が試みられ、院主導で様々な対策が講じられたのである。

2. 崇徳院怨霊の鎮魂

安元三年の八月三日に崇徳院の名誉回復をはかって、それまで「讃岐院」と呼ばれていたのを「崇徳院」に改めた。非業の死を遂げた天皇に対して「徳」のつく諡号を付すことによって、鎮魂がはかられた。こうしたありかたは、崇徳・安德・顕徳(後鳥羽)・順徳といったこの時期怨霊と化した天皇に対して共通に施された対応である。そして、崇徳院によって建立された^{じょうきょう}成勝寺で国家的祈禱が行われたほか、讃岐の崇徳院墓所が整備されて山陵とされ、国家によって追善供養が行われた。寿永二年(1183)に神祠を保元の乱の時に崇徳院の御所があった春日河原に建立することが決定され、翌年に造立がなされた。崇徳院廟が建立されて以降、怨霊に関する記事は見られなくなる。

後白河院が崇徳院怨霊をよりいっそう強く認識したのは、建久二年(1191)に後白河院が病に冒されたときであった。このときは長門に安德天皇を供養するための御影堂が建立されたのと同時に、讃岐の崇徳院陵にも御影堂が建立されて御陵の整備が行われた。崇徳院怨霊は、安德天皇や平家の怨霊の鎮魂と重なり、その鎮魂は国家の急務になっていた。怨霊の鎮魂は、後白河院にとって、王権の維持をしていく上で欠くべからざる儀式であった。

3. 『保元物語』の怨霊崇徳院と後鳥羽院怨霊

保元の乱について書かれた半井本『保元物語』⁷「新院ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付崩御ノ事」では、崇徳院は、五部大乘経を書写し、何とか都においてほしいと思ったのだが、その願いが叶えられなかったため、「今者後生菩提ノ為ニ書タル御経ノ置所ヲダニモ免サレザランニハ、後生迄ノ敵ゴサンナレ。我

⁶ 史料②『愚昧記』参照

⁷ 『保元物語』の中の写本の中で最も成立の古いものの一つ。

願ハ五部大乘経ノ大善根ヲ三悪道ニ抛テ、日本国ノ大悪魔ト成ラム」ト誓ワセ給テ、御舌ノ崎ヲ食切セ座テ、其血ヲ以テ、御経ノ奥ニ此御誓状ヲゾアソバシタル。其後ハ御グシモ剃ズ、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、とあるように、舌尖を食いきった血で経の奥に「日本国ノ大悪魔」となることを書き記し、その後は荒れ狂って天狗の姿になったとされている。

さらに金刀比羅本⁸『保元物語』では、「日本国の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん。」と誓って、舌を噛み切った血で大乘経の奥に誓状を書いたとされる。

崇徳院は長寛二年(1164)に亡くなるが、それまでの間、讃岐で知己の女房達とつましく暮らしていたようである。このときに崇徳院が詠んだとされる歌が南北朝時代に編纂された勅撰和歌集である『風雅和歌集』の巻第九「旅歌」に収録されている。それは、大原の三寂の一人寂然(藤原頼業)が崇徳院のもとを訪れ、京都へ戻る際に崇徳院とかわした歌だが、その中の一句に、

松山へおはしまして後、都なる人のもとにつかわせ給ひける 崇徳院御歌
思ひやれ 都はるかに おきつ波 立ちへだたる こゝろぼそさを(九二七)

という歌がある。ここでは、京都からはるかに隔たった讃岐に住まざるを得なくなった状況に対して、崇徳院はたいそう心細いということを詠っている。しかし、この歌からこの世に対する恨み、ましてや怨念や呪いなどは全くうかがわれない。

実際の崇徳院は、極楽浄土を願って亡くなったのであり、血で書かれた五部大乘経の存在などまったく存在しなかったのである。なぜ、崇徳院怨霊はこのように書かれたのだろうか。その背景には、『保元物語』がまとめられた 1230 年代に大きな社会問題になっていた後鳥羽院怨霊の問題があったからに違いない。

『保元物語』の崇徳院怨霊譚との関係で注目されるのが、嘉禎三年(1237)の奥書をもつ、水無瀬神宮所蔵の「後鳥羽院置文案」である。置文案中の文言「この世の妄念にかゝはられて、魔縁ともなりたる事あらば、この世のため、障りなす事あらんずらん」とは、迷いの心によって魔縁となったならば、怨霊となって祟ることを宣言している。そして、「我身にある善根功德をみな悪道に回向」することによって祟り、自らの子孫を皇位につけようとしている。これは、半井本『保元物語』の「五部大乘経ノ大善根ヲ三悪道ニ抛テ、日本国ノ大悪魔ト成ラム」と誓った崇徳院の場合と酷似している。また、皇位に執着していくことに関しては金刀比羅本「日本国の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん。」の記述と結びつく。

後鳥羽院怨霊の発生と展開、鎮魂については、常に崇徳院のことが取りざたされて、ひとたび静まったに見えた崇徳院怨霊が、後鳥羽院怨霊とからみあって、形を変えて再登場した。ここに崇徳院怨霊を描く『保元物語』を作り上げていく意義が生じたのである。

⁸ 『保元物語』の写本の中で最も流布されたもの。

疑問点、これからの課題

今回、後白河院の崇徳院怨霊の出現と鎮魂、そして描かれた崇徳院怨霊を調べた。しかし、研究ではなくまとめに過ぎないので次は、天狗と崇徳院の関係や平安時代の怨霊観も交えながら発表したいと思う。今回、時間の都合もあり平安時代までしか調べられなかったが、江戸時代に崇徳院が文化に与えた影響や幕末に白峯神宮が出来たことなど面白い面がたくさんあるので次は、史料を用いながら読み解いていきたい。

参考文献

- 尾崎雅嘉著 吉川久校訂 『百人一首一夕話(下)』 岩波文庫 (1973)
- 片平博文「12～13世紀の京都の大火災」『歴史都市防災論文集』 一卷 (2007)
- http://r-cube.ritsumeai.ac.jp/repo/repository/rcube/1832/dmuch1_027_036.pdf
(2019年12月4日 閲覧)
- 九条兼実著 『玉葉』 第二巻 國書刊行会 (1906)
- 永積安明 島田勇雄校注 日本古典文学大系 31『保元物語 平治物語』 岩波書店 (1961)
- 谷口廣之「平家物語内裏炎上の深層：日吉神火と熒惑入太微」『同志社国文学』 38号
(1993) <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/5238/016000380005.pdf>
(2019年12月4日 閲覧)
- 藤原実房著『愚昧記』 中巻 岩波書店 (2013)
- 府中市美術館 『歌川国芳 21世紀の絵画力』 講談社 (2017)
- 美川圭 『後白河天皇一日本一の大天狗一』 ミネルヴァ書房 (2015)
- 山田雄司 『怨霊とは何か』 中公新書 (2014)
- 山田雄司 『崇徳院怨霊の研究』 思文閣出版 (2001)
- 『最新日本史図表』 第一学習社 (2017)

大久保利通

—西郷隆盛との関係と人柄について—

はじめに

西郷隆盛は幕末の英雄として多くの人々に知られており、特に出身地の鹿児島県民を中心に敬愛されている。一方、大久保利通も同じ時代の、鹿児島出身の人物でありながら、不人気である。西郷と大久保がどのように思われていたかは、鹿児島県内に建てられた銅像を調べるとわかる。鹿児島の西郷隆盛像は昭和12年（1937年）、西郷終焉の地で知られる城山の麓に建てられた。有名な上野の西郷隆盛像は明治31年（1898年）と、かなり早い時期に建てられている。一方大久保利通像は昭和54年（1979年）と、西郷より遅れて建てられた上、建設には反対の声もあった。挙句の果てには、台座に刻まれた「大久保利通像」という文字の「通像」だけが右に少しずれている（図1）のを、「西郷隆盛を殺した大久保の像だから、名前をわざとゆがめて書いた」という「都市伝説」⁹が今も流布しているほどだ。

では、なぜ2人の人気にここまで差があるのか。考えられる理由は以下である。

- ① 盟友である西郷を殺した
- ② 「北洋の氷塊」とも称される冷血なイメージ
- ③ 薩摩出身で、薩長閥族を作ったイメージ
- ④ 「兒孫のために美田を買わず」といった西郷に対して、権力を掌握し私腹を肥やした政府のイメージ

特に①が最も大きいであろう。今回は大久保と西郷の関係に特に注目しながら、大久保の人物像についてふれていきたい。

1. 幕末の大久保と西郷

大久保利通は薩摩の加治屋町で育った。加治屋町はわずか70数軒ほどの小さな地域であるが、大久保や西郷をはじめ、大山巖や東郷平八郎、山本権兵衛など、後に明治の要人となる人物を20人ほど輩出した（図2）。当時の大久保にとって、西郷とは兄弟以上の仲であった。大久保家は最下級の武士ではあったが、父・利世に加え利通も職に就いていたため、ある程度の豊かな暮らしをしていた。しかし、利通が20歳の時、状況は一変する。利世が島津家のお家騒動である「お由良騒動」¹⁰に関わっている

⁹この都市伝説は鹿児島県加治屋町にある「維新ふるさと館」の特別顧問を務める福田賢治氏が否定した。福田氏によると、揮毫した当時の県知事の文字が元々ゆがんでいたのが理由らしい。

¹⁰ 藩主島津齊興が、側室のお由良との間に産まれた久光を藩主にしたいと思い、長年齊彬を世嗣のまま捨て置いた。そこで齊彬派の面々が齊彬の藩主擁立をもくろんだところ、その動きを察知した齊興派が返り討ちにしたという事件。その後、生き残った4人の齊彬派が脱藩して、福岡藩主の黒田斉博に助けを求めた。齊博は、齊興の叔父にあたる。齊博は幕府の老中である阿部正弘らにかけ合い、幕

たのである。この騒動で利世は遠島に処され、利通も連座して役職を解かれ、大久保一家は閉門謹慎を命じられた。一切の収入を絶たれた大久保家は4年間、借金を重ねつつ困窮した日々を送っていた。一方、西郷隆盛はお由良騒動の際、父・吉兵衛が仕えていた赤山靱負が切腹処分となったが、特に召し上げられることもなかった。そのため西郷は、大久保を様々な面で支援した。この時の恩を大久保も忘れず、後に西郷が遠島¹¹となった時、衣類や必要な品々を届ける、西郷の留守宅を訪問して家族を慰める、藩や世の中の情勢を手紙で伝えるなど、西郷の生活を支えた。

利通が宥免されると、利通と西郷は、藩主の隠密活動を行う徒目付に任命された。しかし、西郷は斉彬の側近として江戸や京都へ行ったのに比べ、利通は国元にあった。これは西郷の意向だったという。伊地知貞馨が西郷に「大久保にも東上を促したらどうだ」と言った。それに対して西郷は、「大久保は予の畏友で実に予の手駒である。予、若し事に死することあらば、予に代わって起つべきは大久保である。今彼が吾々と共に江戸において斃れるやうなことがあつたならば困るではないか」と止めたという。西郷は利通を自分の分身のように思っており、厚く信頼していたことがわかる。

2. 政府での大久保

大久保は寡黙で威厳のある人であった。当時の内務省の様子を前島密が語っている（『大久保利通』佐々木克監修 2004 講談社 p 23）。そのため、大久保は冷血で恐ろしい人物であると誤解される。しかし実際には、部下は決して呼び捨てにせず、親切な、責任感の強い人物であった（同上 p95, 114）。家庭では家族思いであり、子供たちを非常に可愛がった父としての顔も見せた（同上 p203）。

また、閥族は決して作らず、かつての敵であった奥羽越列藩同盟の一員であった人物でも、能力さえあれば採用していた（同上 p62）。

3. 西南戦争と大久保

西郷らが唱えた征韓論に対して大久保は内治優先を唱え、結果、西郷らは下野することとなった。そして佐賀の乱などの士族反乱が相次ぎ、いずれ鹿児島に西郷も反乱を起こすと考えられるようになった。やがて大久保の元へ、鹿児島で私学校が陸軍の火薬庫を襲撃したという電報が入った。しかし、大久保は、西郷は決して出ていないと断言した。その後、西郷が出たという電報がしきりに届くようになったが、それでも大久保は西郷と関係しているとは信じなかった。西郷の関与が確実となると、大久保は直接西郷に会いに行こうとした。しかし暗殺の危険性などから、結局許可が下りることはなかった。このような葛藤の中、大久保は思い切って征討の兵を出したのである。

西南戦争について、このような逸話が残っている。西南戦争が起こった時、西郷の弟・従道は政府

府は斉興に引退を促した。その結果、斉興は隠居を表明し、斉彬が藩主の地位を継ぐこととなった。

¹¹ 一橋派の弾圧の激化、斉彬の死などにより西郷は、幕府に囚われそうになっていた僧である月照とともに心中をはかるが西郷だけが助かった。西郷は当時幕府のお尋ね者となっていたため、藩は西郷を死んだことにし、「菊池源吾」と改名させた上で、保護するという名目で奄美大島へ送った。

内で肩身が狭くなり、出仕せずに自宅に引きこもるようになった。それを心配した大久保は、毎日のように従道の屋敷を訪れては励まし続け、さらにその心情を察し、しばらく海外へ外交官として赴任する手筈まで整えてやったという。従道の妻・清子はそんな大久保のことを、「親でも及ばないお世話になりました」、「(従道は)何でも相談してみましたので、とても肉親の兄弟でもあんなに親切にはできないほどでありました」と感謝の念を表している。部下に対する大久保の情の厚さが覗える逸話である。

やがて西南戦争は、西郷の死によって幕を閉じた。大久保は西郷の死を知ると、西郷が国賊として後世に誤って伝えられてしまうことを恐れ、伝記を書こうとした。大久保は多忙なため、同郷の歴史家である重野安繹に記述させることにした。しかしその計画は、大久保の多忙により着手できないまま、ついにあの日は訪れた。

4. 大久保の死

明治11年(1878年)5月14日早朝、福島県令の山吉盛典が東京霞が関にあった大久保の私邸を訪問した。そこで大久保は山吉に、次のような国家構想を語った。

私は日本を近代国家にするために、30年の歳月が必要だと思っている。これまでの10年(明治元年~10年)は第一期であり、戦乱の多い創業の時期である。これからの10年(明治11年~20年)は第二期であり、内治を整え産業を育成する肝要な時期である。第三期(明治21年~30年)はこの政策を続けて、国家を完成させる時期である。私は不肖ながら、これからの第二期を担っていきたいと思っている。そして第三期は後輩たちに任せようと考えている。

西南戦争を平定した後の、大久保の国家づくりに対する意気込みが感じられる。しかし、これらの言葉は大久保の遺言となってしまった。

その数十分後、大久保は会議に出席するため赤坂御所へと向かう途中、島田一郎らを中心とする石川県士族らに暗殺されてしまう。紀尾井坂の変である(図3)。民権思想を信奉する不平士族による犯行であった。亡くなった大久保のポケットには、西郷から送られてきた書状が入っていた¹²。西郷からの手紙を暗殺時まで大切に持っていたことから、大久保の西郷への思いを読み取ることができる。

事件後、大久保の資産状況を調べてみると、借金が8000円もあった。今なら数億円に匹敵する金額である。日本にとって必要なことでも、ただちに予算がつかないことは多々ある。それを大久保は私財を投じてカバーしていたのである。内務卿という高い地位でありながら、大久保は得た金を貯めたり子孫のために残したりするのではなく、日本の近代化のために使っていたのである。

¹² 佐々木(2004) p188

『大久保利通文書 四』日本史籍協会 1968 東京大学出版会 p436

5. 現代の大久保と西郷

平成 29 年（2017 年）9 月 23 日、西南戦争からちょうど 140 年たったその日、式典に大久保利通と西郷隆盛の子孫が出席した。利通の曾孫の利泰氏と隆盛の曾孫の吉太郎氏は慰霊塔の前でがっちりと握手を交わしたのである（図 4）。式典終了後、NHK 記者の正亀賢司氏は、この 140 年間の大久保家と西郷家について尋ねた。すると、このような答えが返ってきた。「じつは利通の妹の孫が西郷隆盛の孫と結婚している。だから親戚なんですよ」。また、利泰氏は結婚した 2 人に会ったことがあるらしく、2 人が「大久保家と西郷家のそれぞれの集まりに参加できる」と嬉しそうに語っていたことが今でも記憶に残っているとのことだった。このように、大久保家と西郷家の関係は西南戦争によっても切れることがなく、西南戦争前の利通と隆盛がそうであったような、親密な関係が現在に至っても両家に存在するといえるのではないだろうか。

おわりに

「土佐・肥前出身者が中心の留守政府で作られた征韓論は、薩長閥政府によって否決されてしまう。負けた征韓派たちは下野し、国会の開設を求めるようになり、それが自由民権運動へと発展した。」主に教科書では、征韓論争はこのように書かれている。それにより征韓論争は、意見が認められず下野した西郷や土肥出身者が「善」、閥族を作成し、国会をなかなか作らない薩長出身者を「悪」といった構図で見られがちであり、征韓論争後の政府側の人々は一枚岩的に「悪」として見られてしまう。しかしこのような政府側にも、閥族を嫌って作らず、私財を投じてまで日本の未来を考えた大久保のような政治家がいたことを忘れてはならない。西南戦争で大久保に負け、西郷はどのようなことを思ったかはわからない。しかし、大久保は征討の兵を出すことを葛藤し、西郷の死を伝えられると涙を流した。大久保は、西郷と同じく情に厚い男だったのだ。

参考文献

『西南戦争と大久保暗殺の謎』井沢元彦 2016 小学館

『素顔の西郷隆盛』磯田道史 2018 新潮社

『大久保利通 西郷どんを屠った男』河合敦 2018 徳間書店

『日本史上最高の英雄大久保利通』倉山満 2018 徳間書店

『大久保利通』佐々木克監修 2004 講談社

『西郷隆盛と西南戦争を歩く』正亀賢司 2018 文藝春秋

『加治屋町編 1 偉人輩出 郷中の絆 - 鹿児島 - 地域』朝日新聞デジタル (2017.2.1)

<http://www.asahi.com/area/kagoshima/articles/MTW20170201470490001.html>

(2019 年 12 月 3 日閲覧)

西暦	邦暦	出来事
1828	文政 10	西郷隆盛の誕生
1830	天保元	大久保利通の誕生
1850	嘉永 3	お由良騒動
1851	嘉永 4	島津斉彬が藩主となる
1853	嘉永 6	ペリー、浦賀に来航
1858	安政 5	安政の大獄 斉彬の急逝 西郷、月照と心中を図るが失敗、遠島となる（～1861）
1862	文久 2	西郷、2度目の遠島（～1864）
1863	文久 3	薩英戦争
1864	元治元	禁門の変、第一次長州征伐
1866	慶応 2	薩長同盟の成立 第二次長州征伐
1867	慶応 3	大政奉還、王政復古の大号令
1868	慶応 4	戊辰戦争（～1869）
1871	明治 4	大久保、岩倉使節団に同行（～1873）
1873	明治 6	西郷、下野 大久保、内務卿に就任
1874	明治 7	佐賀の乱 西郷、私学校設立
1876	明治 9	廃刀令
1877	明治 10	西南戦争、西郷の死
1878	明治 11	紀尾井坂の変
1898	明治 31	上野に西郷隆盛像が建てられる
1937	昭和 12	鹿児島島の城山に西郷隆盛像が建てられる
1979	昭和 54	大久保利通像が建てられる
2017	平成 29	西南戦争 140 年の式典

吉田松陰が見た日本と世界

はじめに

吉田松陰は幕末の思想家の一人で、松下村塾で後に日本の舵をとる人々を育てたことで知られている。彼は尊王攘夷の考えを持っていたとされるが、国際情勢にも詳しく本当に攘夷が可能と考えていたのか疑問に思った。今回はなぜ彼が尊王攘夷に至ったのか調べてみた。

1. 吉田松陰の生い立ち

吉田松陰は 1830 年に長州藩士の杉百合之助の次男として生まれた。百合之助には 2 人の弟がおり、次男の大助は山鹿流兵学師範の吉田家、三男の文之進は玉木家に養子入りした。大助には子はおらず、甥の松陰が 5 歳でその養子となった。しかし、山鹿流兵学を教えるはずの大助はすぐに亡くなったため、百合之助や文之進が儒学や兵学を中心に松陰に大変厳しく教えた。その様子を妹の児玉千代は後に「之を見るに忍びず」と語り、おそらく体罰もあったとされている。その結果、9 歳で藩校の明倫館に出仕し、1840 年に 11 歳で藩主の毛利敬親に山鹿素行の武家全書を講義した。

2. 長州藩の兵学者吉田松陰

松陰は長州藩の兵学者として長い海岸線をもつ長門・周防の国を防衛する責任があり最新の情報を手にする必要があり、1845 年に養父である大助の盟友の山田亦介から世界情勢について学んでいる。当時中国では清とイギリスの間でアヘン戦争が起こり、清が敗北して不平等条約の南京条約を結んでいた。松陰はこれを亦介から知らされた。亦介はヨーロッパ諸国はインドや清を征服し、琉球や長崎も狙っていると考え、藩ごとの防衛では限界があると教えた。しかし、これを聞いても松陰は日本全体での防衛が必要とは考えておらず、松陰の初期の作の『水陸戦略』には「異賊防禦手当は邦国第一の急務」と記し、防長二国だけの防衛を主張していた。

また、この頃の松陰は家学や伝統に忠実な保守主義であり、自身が学んでいる和流砲術に絶対の自信があった。『水陸戦略』には「賊艦の鋸大堅実なるを恐れ候へども、砲家の説に鋸大は鋸大なる程、吾が的になり易く大いに好む所、又何程堅実にてても四五貫目已上の鉄丸を打懸候へば貫かずと言ふこと之なき」とあり、西洋船が大きければ大きいほどいい標的であり、四五貫（20 グラム弱）の弾丸使えば貫通できないこともないだろうと主張していた。しかし、松陰はまだ西洋船を見たことがなく、四五貫の威力も人から聞いたものだった。また、海岸巡視に出たとき浦の漁船を見て「幅七尺、長さ三丈、堅実にして軍用に供すべし」と記したが、七尺は約 2.1 メートルで三丈は約 5.5 メートルであり、堅実と記してはいるが、西洋船には決して太刀打ちできる大きさではなかった。

3. 遊歴での世界観の変化

1850年に松陰は長崎・平戸に遊学し、長崎の出島ではオランダの商船に乗る機会を得た。これは松陰が初めて直接西洋に出会った瞬間でもあり、その衝撃は大きかったはずだ。蘭船の様子を『西遊日記』に「蘭船に乗り、上層・第二層を見る。上層に砲六門あり、二層には銅箱等を多く積む。」と記し、その大きさは松陰の予想よりもはるかに巨大で堅実だった。また、この六門というのは前年の長州藩の羽賀台演習で使用した大砲の数と同じであり、さらにその質はオランダ商船とは大きな差があった。

松陰は平戸で清の魏源が書いた『聖武記付録』に出会った。ここではアヘン戦争での反省や自己分析が記されていて、『西遊日記』にこの本について多くの記録をつけており、学ぶべきことが多かったようだ。魏源は「徒に中華を侈張するを知り、未だ寰瀛の大なるを見ず」と記した。つまり、「清は中華を主張するばかりで世界の大きさを知らなかった」と記し、松陰もこれを名言と称賛した。この影響から松陰は伝統主義に固執せず、世界を知ろうと考えるようになった。

また、アヘン戦争で清の砲台がイギリスの軍艦に徹底的に攻撃されたことを知り、松陰は造船技術を高め、砲台よりも軍艦を造るべきと考えるようになった。しかし、これは本来の家学の山鹿流を否定することに繋がり、松陰は家学と西洋の戦術の間で進むべき道を模索するようになった。

4. 国家思想への変化

松陰は1851年に藩主に従って江戸に入ると儒者や兵学者らを訪問したが、儒者は西洋事情を知ることすら拒否していると考えようになった。また、西洋や和洋の兵学者を訪問した。結局、松陰は山鹿素水ら流兵学者の海防は必要だが、西洋兵学に学ぶ必要はないという考えと佐久間象山ら西洋兵学者の西洋に学ぼうとする考えの良い所取りをしようとした。しかし、江戸で山鹿素水の私塾に出入りするようになると山鹿流の講義に批判的な目を向けるようになり、かといって佐久間象山を訪問することも少なく、「江戸の地には師とすべき人のなし」と記し、1851年には脱藩して東北に向かおうとした。

松陰は出発予定の日付を守るため脱藩した。江戸藩邸を脱出した松陰は追手から隠れるため水戸に滞在し、そこで水戸学に出会うこととなった。水戸学は儒学と日本史と国学や神道などを組み合わせた学問であり、尊王の考えを持っていた。松陰は後期水戸学の中心となった会沢正志齋に七回は訪問している。来原良三への手紙に「身、皇国に生まれて、皇国の皇国たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」と記し、日本が日本である根拠を知ろうとして、六国史を読みふけるようになったと書いた。ここで松陰は幕藩体制から脱出し、日本を守るべきものとして認識するようになった。

松陰は脱藩して水戸に来たが、毛利敬親は松陰を重視しており、諸国遊学許可を与え、東北を巡った後江戸に向かった。

5. 攘夷思想

松陰は1853年の6月1日に江戸に入り、その2日後の3日にペリー率いる黒船が浦賀に入ると4日にはその知らせが松陰にもたらされた。松陰はすぐに長州藩主に『将及私言』という書を提出している。そこでは自分の藩をそれぞれ守るべきという考えを「実に天下の大義に暗きものと云うべし」と批判した。水戸学との出会いでこの頃の松陰は国家全体での防衛を主張するようになっていた。ここで松陰は「西洋に学ぶことなし」と主張していた山鹿素水が非戦論を主張していることを知り、西洋兵学の導入を主張するようになり、佐久間象山に接近するようになった。

松陰はアメリカの条約を「一として許允せらるべきものなし。夷等、来春には答書を取りに来らん、願ふ所一も許允なき時は、彼れ豈に徒然として帰らんや。然れば来春には必定一戦に及ぶべし。」と『将及私言』で記し、アメリカの求める和親や通商の条約は決して認められず、回答期限の来春には開戦に至るだろうと予測した。また、条約を戦うことなく受け入れようとする幕府を批判し、必戦の覚悟で挑もうとしていた。蘭船に乗った松陰が本気で外国を追い払うことができると思っていたとは考えにくく、日本が条約を無条件に受け入れることは戦う前から敗北することと同じと考え、それを避けようとしていたようだ。

松陰は決して海外との交易を否定していたわけではなかった。しかし、松陰は日本を野蛮な存在とみなし、不平等に扱ったペリーは「礼」を欠いており、これでは日本の独立すら保証されないと考えたから攘夷を主張したようだ。しかし、幕府は和親条約を結ぶことを選択した。また、松陰は異国を知ることと異国に対処できると考え、黒船に密航した。

6. 松陰の尊王

当時、日本の一部の知識人は日本のことに関して皇帝を中心とする帝国と考えていた。しかし、将軍と天皇がおり、それを語ることは将軍の否定に繋がるため帝国の字は使われることは少なかった。しかし、松陰は日本が皇帝である天皇を中心とした帝国であることを証明して、主権が天皇にあることを確認し、帝国が力を持っていた海外に日本が同じく帝国であることを主張することで日本の独立を主張しようとした。しかし幕府は外交文書に自らを「日本帝国政府」と称しており、松陰は宇都宮黙霖への書でそれを「甚だ不可なり」と批判し、また「果してかくの如くんば、外国人必ず幕府を以て皇国の至尊となさん」と帝国政府を名乗れば元首のように外国に扱われてしまい、天皇の外交権が亡くなり天皇の権威が落ちてしまうと恐れた。『外蕃通略』には「人臣に外交なし」と記し外交権を独占する幕府を批判した。あくまで天皇の臣下である将軍は外交文書において日本の元首を名乗ることはできず、外国の皇帝が元首を主張しているのに対して立場が低くなってしまうことを松陰は懸念しており、その解決策が名実ともに天皇を元首とすることであった。

松陰は密航の罪で野山獄に入れられ、そこで読書に没頭し、その中で孟子を囚人に講義するなど牢屋

の中でも学問に熱中していた。その後家で塾居する条件で出獄すると伯父の玉木が創設した松下村塾の講師となり、多くの弟子を育て維新の思想的な祖となった。

おわりに

吉田松陰ははじめから尊王攘夷を主張していたわけではなく、長州から出る前は外国を脅威とは考えておらず、日本全体を守るという考えは持っていなかった。しかし、長崎でオランダ船に出会うことで異国の強さを知り、水戸学に出会い守るべき日本の姿を見出した。そして、黒船からの理不尽な要求に対抗するために尊王攘夷を見出したように様々な出会いで自らを変えていった。吉田松陰の考えは明治維新やその後の国家に大きく影響したはずだ。次は松陰の考えが維新にどのように関わったか調べてみたい。

参考文献

桐原健真『吉田松陰の思想と行動幕末日本における自他認識の展開』東北大学出版会、2009

北影雄幸『吉田松陰の主著を読む』勉誠出版、2014

木村幸比古『吉田松陰の実学世界を見据えた大和魂』PHP 研究所、2005

桐原健真『吉田松陰「日本」を発見した思想家』、筑摩書房、2014

狄仁傑と則天武后

はじめに

狄仁傑という人物は唐の名宰相として知られる。彼が宰相の位にいたのはわずか三年間であるが、則天武后から大きな信頼を寄せられ、武后政治の最晩年においての最重要人物である。今回は狄仁傑について、武后とのかかわりにも触れながらまとめていきたいと思う。

1. 高宗時代

狄仁傑は 630 年に中堅官僚の家に生まれ、科挙で合格して官僚となった。その後官吏を取り締まる大理寺の役人となるが、この頃の狄仁傑と皇帝である高宗との逸話が残っている。高宗の父、太宗の墓にある木を誤って二人の役人が伐ってしまった。狄仁傑は二人を罷免するに留めたが高宗は激怒、二人を処刑しようとした。しかし狄仁傑は「刑は法律に基づくべき」とし一歩も引かなかった。結局高宗は狄仁傑に従わざるを得なかった。権力に屈さず自らの正義を貫く点がこの話に表れている。

2. 寧州、豫州の長官として

この事件の後しばらく目立った活躍はあらわれないものの、寧州で長官となった時は狄仁傑をたたえる徳政碑が立てられるほど領内をよく治めた。688 年には越王李貞の反乱（武後の李氏排除の動きに反発する太宗の八男、李貞を中心とした反乱）のあとを收拾するため豫州（河南府）の長官となる。越王の乱によって死刑、あるいは奴隷となる予定だった民衆が 6000 人以上いたが、狄仁傑は彼らが無実であることを武後に密奏し、流罪へと刑を変更させている。この民衆が流刑地へ向かう途中に寧州を通った。寧州の長老から自分たちの刑が軽くなったのはおそらく狄仁傑のおかげだということを知った豫州の民は、流刑先で碑を立て狄仁傑の徳をたたえたという。

民衆が救われた一方で狄仁傑は、軍を率いて越王の乱を鎮圧した宰相である張光輔の鎮圧後の振る舞いに苦言を呈した結果、左遷させられてしまう。しかし、もともと狄仁傑に注目していた武后によってすぐに中央へ戻る事となる。反乱側だった民衆の減刑を願い出た勇氣、職務に対する誠実さなどを武后が評価していたのであろう。

3. 無実の罪

このようにして中央に戻った狄仁傑を危険視したのは来俊臣などの酷吏とよばれる者たちである。当時は密告が奨励されており、厳しい拷問で罪人の自白を引き出し、時には無実の者に罪を着せるといった横暴さを極めていたのが酷吏であった。このような酷吏にとって狄仁傑のような筋を曲げない人物は目障りであった。692年、来俊臣のでっち上げた謀叛の罪によって狄仁傑は獄に入れられてしまう。

しかし狄仁傑は、最初の取り調べで罪を認めれば死刑は免れるという法律を利用して生き延び、さらに布切れに武后宛の手紙を書いて面会に来た息子へと渡し、手紙を武後に直接届けさせた。この手紙を

読んだ武后は自ら取り調べを行い、それによって狄仁傑の無実は証明された。

出獄した狄仁傑は南下してくる契丹への対応のため、魏州の長官に任じられた。ただ契丹は魏州からまだ遠くにいたため、防備のため城に集められていた農民を開放した。契丹の退却後は契丹の被害を受けた河北（黄河より北の地域）を巡回し、幽州の長官となったのちに宰相となって中央へ戻った。狄仁傑の存在感は非常に大きく、武后から「国老」とよばれるほどの大きな信頼を寄せるようになった。また、これに前後して、酷吏の来俊臣は処刑されている。

4.宰相として

狄仁傑が宰相となったころ、武后の後を継ぐ皇太子選定の議論が活発だった。武后の甥などが皇太子を同じ武氏から出すべきだと主張する中、狄仁傑は一度皇太子を廃された武后の子である李顕を推挙した。「叔母と甥、母と子の関係どちらが親密だろうか」と武后に問う狄仁傑に対し武后は「これは家庭内の問題だ」として逃げた。しかし狄仁傑は「王者は世界を家族としている。国民すべてが家族である中、宰相である私が口を挟まないわけにはいかない」と迫った。「国老」の意見は重かったのか、李顕が皇太子に復帰し後に中宗となる。このときの武后と狄仁傑の対話には前例がある。武后が皇后になる前、まだ身分の低い武后を皇后にしたい高宗が、軍の長官である李勣に対し「武昭儀（武后）を皇后にしたいが大臣に反対されている」と相談したところ、李勣は「これは陛下の家庭のことであり、他人が口を出すことではない」と言い、その結果武后が皇后になった、というものである。狄仁傑は、武后が李勣と同じようなことを言うであろうと予想したうえで「国民すべてが家族である」という反論を準備していたのであろう。

また、狄仁傑は武后の命を受け、人材登用を行った。特に張柬之はすでに七十代半ばであり地方で不遇な立場であったが、中央へ召集されたのち八十歳近くになって宰相となった。このほかにも数十人の有能官僚の登用を武后に勧めている。そして、この時登用された張柬之らが武后廢位の中心人物となるのである。

5.狄仁傑の死後

狄仁傑は700年、病により71歳で亡くなる。武后は彼の死を惜しみ三日間喪に服した。彼の死後、朝廷で議論が定まらないときに武后は「天はなぜわが国老をこうも早く奪ったのか」と嘆いたという。

705年、張柬之らは武后の廢位へ向けて動き出した。クーデターを起こして李顕を連れ出し、武后お気に入りの美男子の兄弟を殺害して素早く武后に廢位を迫った。この三日後に武后は退位、李顕が即位して中宗となり国号も唐に戻った。また、この年の十一月に武后は亡くなる。

狄仁傑が抜擢した人物の中に姚崇という人物がいる。彼は武后期終盤の宰相であっただけでなく玄宗のもとでも宰相となり、開元の治の中心人物となる。

おわりに

任用される過程や獄に入れられる事件など、狄仁傑の生涯には良くも悪くも武后が大きく影響しているように感じた。則天武后という存在の大きさを再認識するとともに、張柬之や姚崇などの有能官僚を多く推挙した狄仁傑はもっと高く評価されるべきだと感じた。

参考文献

『中国歴史人物選 第4巻 則天武后』 氣賀澤保規 白帝社（1995）

『追跡・則天武后』 今泉恂之介 新潮社（1997）

積層する都市

はじめに

都市は多様な活動やモノが存在する場所であり、日常生活において切っても切り離せない関係にある。誰かが都市を整備し、計画し、誰かが生活しているわけであるがそれは過去からずっと積み重なってきたことである。そのような都市の歴史を見ていく。

1. 文明の起こりと都市

狩猟・採集の時代から農耕の時代へと移ると人は定住化し、農作物を貯蔵する技術を得て交換を行うようになり、富を手にした。この変化は権力者を生み、同時に集住も促した。メソポタミア、エジプト、インダス、黄河・長江といった所謂四大文明は都市あってこそその文明である。都市と文明は密接な関係にある。まずは文明の起こりと共に発達した古代の都市をみていく。

◇メソポタミア

チグリス、ユーフラテス川流域のウル、ウルクといった初期の都市国家やバビロニア王国のバビロンなどが有名である。自然の障壁の少ないメソポタミアの都市は環濠要塞化され外敵から防御し、ジグuratと呼ばれる神殿が特徴的である。

◇エジプト

古代エジプトでは王陵を築くために遷都が繰り返され都市生活が発達しなかった。地形上、外敵が侵入しづらく環濠要塞化されることも少なかった。

◇インダス

インダス川流域のハラッパー、モヘンジョ＝ダロが有名である。人類史上最初の計画的な都市で計画住区や下水道などの都市施設があり、碁盤目状の市街地が広がっている。特徴として、市街地と城塞が分離されている。

◇中国

古代中国の都市は城壁と城門、格子状の幾何学的形態が特徴的である。『周礼考工記』の『三礼図』を参考にしたといわれている。

◇ギリシア

古代ギリシア都市は地形的要因、強大な外敵がないことなどから強固な城壁を必要とせず、守護神をつくり都市を守ろうとした。守護神を奉祭する神殿や議事堂、劇場、競技場などその中心にあるアゴラで構成されている。ヒッポダモスがアテネを幾何学的な碁盤目状に改造し植民都市へと広がっていった。

◇ローマ

古代ローマではレンガやコンクリートを使い巨大な建築物をつくり上げたことが特徴的で神殿、浴場、闘技場などが建設された。ローマ帝国は都市ローマを頂点とする都市国家の連合であり、領内に

次々と植民都市を建設し都市的文化を広めた。ロンドン、パリ、バルセロナ、ウィーンといったヨーロッパ諸都市の起源ともなった。

◇日本

藤原京に始まり天皇の崩御、干ばつ、飢饉、政変などが起こる度に遷都したがいずれも中国の都城制度をモデルとした計画都市であった。中国とは違い城壁がない特徴がある。

2. 封建領主の都市

◇中世ヨーロッパ

ローマ帝国分裂後、社会経済の混乱や通商の衰退などによりヨーロッパの都市住民の多くは封建領主の下で農奴となり、都市の規模も小さくなった。次第に封建領主間で戦争が起こるようになると都市を堀や城壁で囲み避難所となった教会が力を持ち出した。商人や職人はギルドを形成し地位が向上した。

・特徴

街路：迷路的か非直線

高密な集住形態：2階～数階建てでファサードが連続

広場：都市中央にあり教会や市庁舎が建設され集会、議会、裁判、処刑などが行われた

一方で、ルネサンス期には碁盤目状、放射状、螺旋状といった幾何学的で規則的な構造を持つ都市も登場するようになった。

◇日本の城下町

古代日本では都市が城壁や堀を持たなかったが中世末になると真宗寺院を核とした寺内町が生まれ戦国時代を乗り切ろうとした。寺内町崩壊後、戦国武将が城下町を形成した。城下町の多くは現在の日本の都市の起源となっている。

・特徴

街路：非直線的だが近世以降格子状の街割が使われる都市もあった

身分制ゾーニング：城を中心に身分秩序に従って配置した

環濠城壁外側の市街地：外敵防御は強固な城壁ではなく、居住地で敵に応戦した

3. バロック都市

17世紀頃からヨーロッパ都市では壮大さ、複雑さ動的・劇的空間演出を意図したデザインとなり絶対王政の権威表出に利用された。幾何学的なデザインを応用し、遠近法的景観や絵画的景観となった。中世の城壁で囲まれた過密な都市は残ったが城壁は次第に壊されていった。

・特徴

開放型広場：中世都市の建物の壁で囲まれた空間かオープンスペースのある空間へ直線的な広幅員大

通り：広い大通りは君主の権力の表象であった

壁面建築：建物のファサードを連続的に見せ荘厳な雰囲気演出

公園：緑やオープンスペースが都市に入り公園が整備された

4. 近代都市計画

産業革命が起こり労働者の住宅や住環境の問題を抱えるようになると理想都市の実現を求めるようになった。

◇田園都市論

エベネザー・ハワードは19世紀末、人口600万人を超え深刻な公害が発生していたロンドンの状況をから、都市機能を農村に移出、融合させようと1898年に『田園都市論』を発表した。

- ・都市拡大を制御
- ・私有を認めない
- ・計画的に人口規模を制限
- ・開発利益の一部を地域に還元
- ・自足性
- ・自由と協同

を特徴としロンドン近郊のレッチワースに実現させた。田園都市の成功は世界の郊外住宅地開発に影響を大きく及ぼすことになった。

◇近隣住区論

クラレンス・ペリーが人々は良好な地域コミュニティの中で暮らすべきという理念のもと、近隣住区論を1924年にまとめた。

- ・小学校とコミュニティセンターと教会を核とした地域コミュニティの空間的なまとまりの設定
- ・外周に幹線道路を配置し、通過交通を迂回させる
- ・人口規模に応じた商店街を1カ所以上、外周の交差点またはその近くに分離配置する
- ・小公園とレクリエーションスペースを体系的に配置
- ・道路網は段階的に構成して住区内の循環交通を容易にする

というものである。この原則は各国の事情に合わせて調整され、各国の都市計画基準採用にされた。

◇ラドバーン方式

スーパーブロックとクルドサックを組み合わせ住宅地内の歩行者と車の動線を完全に分離した計画方式で、ニューヨーク近郊のニュージャージー州に「自動車時代の都市」として1928年に計画されたラドバーン地区で導入された。近隣住区論を応用して、歩道と車道を立体的に分離し、クルドサック沿いの住宅地の背後の緑地を連続させた。近隣住区論と共に人口と自動車の増加が背景にあり各国へ広がった。

◇ル・コルビュジェ

ル・コルビュジェは1922年に「人口300万人の現代都市」を発表した。中心に空港と鉄道駅と高速道路のジャンクションを立体的に積層した交通センター、鉄筋コンクリート造・地上60階建ての超高層オフィスの林立、それを囲むジグザグ型と街区型の中層集合住宅群で構成されている。郊外には独立住宅地区や工業地域などが配置され、都市中心部の95%が開放され、広大な公園のようになる。人々は緑地の中を自由に闊歩し、自動車と鉄道は高架上を疾走する。ル・コルビュジェは機能的な都市へと再構築しようとした。1933年に近代建築国際会議の第4回アテネ大会で都市は居住・余暇・勤労・交通の機能を明確に区別し、それぞれを効率的に結ばれるよう配置すべきことや緑・太陽・空間を持つべきとしたアテネ憲章が採択され全世界へと広がった。

5. 近代都市計画への批判

◇ジェイン・ジェイコブズ

ジェイコブズは、1961年に『アメリカ大都市の死と生』を公刊し、近代の正統派の都市計画および都市再開発の基本原則と理念を批判した。ジェイコブズは都市が安全で暮らしやすく経済的な活力を生じるためには「多様性」が必要であるとした。

・都市多様性生成の4条件

- ①主要用途の混合の必要性
- ②小さな街区の必要性
- ③古い建物の必要性
- ④高密度居住の必要性

おわりに

都市は様々な要因によって変化し、それが積み重なってきたが現在を生きる私たちも都市の歴史をつくる一員である。未来に起きる都市の変化もいずれは積み重なっていく。都市は日常生活と密接に関係しあっており、よりよい都市生活が送れるよう都市について少しでも関心を持ってもらえれば幸いである。

参考文献

- 伊藤雅春ほか『都市計画とまちづくりがわかる本』 彰国社 2017年
中島直人『都市計画の思想と場所』 東京大学出版会 2018年
中野恒明『まちの賑わいをとりもどす』 花伝社 2017年
日端康雄『都市計画の世界史』 講談社 2008年

淳仁廃帝時の女帝の意識の分析

はじめに

前回の発表において私は宇佐八幡宮神託事件を道鏡主導のものとして捉えたが、これは女帝の関与を一切否定するものとなった。しかし、宇佐八幡宮の事件においては女帝が主導でなければ、成立しえないとする論も多数存在し、道鏡やその周りの勢力のみが実行しえたとは考えにくい。それにも関わらず私が女帝の関与を否定したのは、女帝が自らの正当性を血統にもとめていたからで、それを根拠に国家の大事と賞罰を行うと詔を出している。(天平宝事六年六月三日勅) これを見ると自己の正当性を血統に求めたことが理解でき、故に道鏡擁立運動を主導・加担することは矛盾していると考えたためである。今回はこの矛盾を少しでも解消することを考えたいと思う。

1.道鏡の即位の可能性とその矛盾

日本の天皇制という制度においては、万世一系という言葉の指し示すように皇統に在る人間でなくては、即位の可能性はない。そう考えれば、道鏡の即位の可能性があると自体が不自然な話となる。

北山氏は

「皇威なお盛んであった天平の末葉に、臣下にして、公然と皇位を覬覦する者が宮廷にあらわれたことじたいは、まことに、異常である。」

北山茂夫『日本古代政治史の研究』1959 岩波書店 p373

とのべているし、中西氏は地の文と宣命を分けて分析し、宇佐八幡宮神託事件は史実を『続日本紀』の編者によって換骨奪胎させられていると表現した。続日本紀の宇佐八幡宮神託事件にかんする記述は①神護景雲三年九月二十五日の宣命②神護景雲三年九月二十五日の地の文③神護景雲三年十月一日の宣命に分けて考えている。特に③は膨大な長さになるため深くは書けないが、①は単に清麻呂・法均が間違った神託を持ってきたことに対し女帝が激怒したとしか書かれておらず③は元正や聖武を持ち出して単に後継の擁立の運動があったことを告げ、戒めている。①と③には道鏡が八幡神託を利用し皇位を狙ったという事実は出てきていない。よってその内容が記されたのは②の文からであり、これは延暦期に入って以降の桓武朝の創作であると結論付けている。そのうえで天平宝事六年六月三日勅を解きながら、

「かえって称徳に道鏡を皇位につけようとする意志があったとする方が、その建前の称徳の皇位観と矛盾するのである。」と述べている。

中西康裕『続日本紀と奈良朝の政変』2002 吉川弘文館 p 227－ p 251

私は林氏・仁藤氏らが指摘するようにこの説を全面的に賛成することはできないが、宣命を分析して

みながら今一度自分の考えを明確にしたいと思う。

2.天平宝字八年十月九日勅

かけましくも畏き朕が天の先帝の御命以て朕に勅りたまひしく、天の下は朕が子いましに授けた給ふ事をし云はば、王を奴と成すとも、奴を王と云ふとも、汝のせむまにまに、仮令後に帝と立ちてある人い立ちの後に汝のために礼なくして従わずなめく在らむ人をば帝の位に置くことは得ざれ、また君臣の理に従ひて貞しく清き心を以て助けつかへ奉らむし帝と在ることは得む、と勅りたまひき。

この勅命は淳仁を山村王・和気王・百済王敬福らに兵隊多数を以て武力により退位させた時のものである。内容は聖武が残した言葉の回想となっており、「王を奴隷としてもいいし、奴隷を王と成してもよい。孝謙のあとに位についた者でも、孝謙を軽んじる者は天皇としてはならない。君臣をわきまえ、よく孝謙を助けるものが天皇と為ることができる。」といったものである。この勅命は明らかに淳仁を意識していることは言うまでもないが、これをそのまま解釈するならば、道鏡は即位の可能性を持つことになる。

北山氏はこの可能性について

「はたして、聖武が臣下を天皇にすることまで、ゆるしたかどうか。それは、疑問だという以上の、奇怪なことである。女帝にたいしてせいぜいのところ廃立の自由をみとめたという程度ではなかったろうかとおもう。」

北山茂夫『日本古代政治史の研究』1959 岩波書店 p 385

と述べ、あとに述べた「また君臣の理に従ひて貞しく清き心を以て助けつかへ奉らむし帝と在ることは得む。」の部分を道鏡の即位の可能性を示す女帝の意思表示だと解釈している。北山氏はこの時点において女帝の中に道鏡の即位の可能性があつてことを強調している。

中川氏は

「ことに血統を強調するのは以後も常套手段とするが、皇嗣の裁量権を明言したからといってこの段階で道鏡を考慮に入れていたとは考え難い。」

とし、出家の帝と称し、重祚の意思を示した九月二十日の宣命を重視し、この勅に道鏡即位の大きな意味を持たせていない。(中川氏は道鏡が自らの権力保持のために八幡宮事件を主導したと主張。)

中川収『奈良朝政治史の研究』1991 高階書店 p267

勝浦氏は先の両者と同じく、女帝が皇位継承者の決定権を父より与えられたとする女帝の認識をふま

えながら、宇佐八幡宮神託事件後の「天の授けて給はぬ人に授けては保つことも得ず、亦変りて身も滅びぬるものぞ。」の宣命を引きながら、天の意を皇継の要素として重要視し、祥瑞を用いて道鏡の即位を天命のもとに正当化したと述べている。

勝浦令子 『孝謙・称徳天皇』2014 ミネルヴァ書房 p 185-p193

3.天平宝字八年十月十四日勅

諸々仕へ奉る上中下の人等の念へらまく、国の鎮とは皇太子を置き定めてし、心も安く穏ひにあり、と常人の念ひいふ所にあり。然るに今の間此の太子を定め賜はず在る故は、人の能けむと念ひ定むるも必ず能くしも在らず。天の授けざるを得て在る人は、受けても全く坐す物にも在らず、後に壊れぬ。故、是を以て念へば、人の授くるに依りても得ず、力を以て競ふべきものにもあらず。猶天のゆるして授くべき人はあらむと念ひて、定め賜はぬにこそあれ。この天津日嗣の位を朕一人貪りて、後の継を定めじとにはあらず。

北山氏は

「女帝は、皇嗣をめぐって『力を以て競ふ』事態になりかねないのを酷く恐れ、警戒していたのである。」と述べるにとどまっている。

北山茂夫『女帝と道鏡』1969 中公新書 p 65

河内氏は

「つまり、意中の人物が存在しているからこそ、この詔が出されたとすることは十分可能である。そうした場合、その人物としては道鏡以外にはありえない。(中略) 道鏡の名を持ち出すことは、この段階ではあまりに唐突であり、まだ口に出して言えることではない。」

と述べ道鏡擁立計画のスタートであると述べている。

河内祥輔 『古代政治史における天皇制の論理』1986 吉川弘文館 p 111-112

瀧浪氏は

「詔にいう『後に壊れぬ』、すなわち破滅を招いたというのが、淳仁の擁立をさすことは言うまでもないが、それを強調することで立太子問題をカモフラージュしている感もある。」

と述べ、おそらく瀧浪氏の論（女帝は道鏡擁立に否定的としている）から考えると、おそらくこの宣命に道鏡の存在を認めてはいないのだと考えられる。それよりも私が重視したいのは

「天命によって選ばれた人が現れるのを私は待っていると、瑞祥を表して皇太子と為るべき人がきつと出現するはずであるといった称徳の言葉は、端的に言えば和氣王の存在をまったく無視するものであり、適格者でないことを表明したことに他ならないからである。」と述べていることである。和氣王は淳仁の弟の子であり、当時の皇太子となるのに問題はないと述べている。

瀧浪貞子『敗者の日本史 奈良朝の政変と道鏡』2013 吉川弘文館 p 139-p142

4.私見

ここまで淳仁を追い落したあたりの宣命とその先行研究について述べてきたが、私個人の結論としては、この時点においてすでに女帝は道鏡にある程度期待するところがあったのではないかと思う。中川氏の言うように9月20日の宣命において「出家の帝」としてふるまっていたことは、その時点において自他ともに重祚を認識していたとかがえるべきである。では、その上で老齢の女帝が皇太子の指名を先送りにしたことは道鏡を想起せざるをえない。淳仁を廃した女帝は『続日本紀』内には特に仲麻呂の乱に関与した記録のない船親王・池田親王を処罰し、また後には和気王も殺害されている。船親王・池田親王は淳仁が立太子される前段階において、文室弥努・大伴古麻呂によって推薦されていることから考えると貴族層はある程度舎人の血統に今後の天皇を見出しており、淳仁政権も一応の落としどころとして安定していたのではないかと思う。

ここで女帝の皇太子を決定することのデメリットは

①草壁皇統の断絶を認める。

②道鏡の即位の可能性の否定。

①に関して言えば、これは女帝に子がいない以上当然の帰結であり、聖武が道祖王を皇太子としたものの、聖武の言葉をことさらに持ち出し「また君臣の理に従ひて貞しく清き心を以て助けつかへ奉らむし帝と在ることは得む。」と述べ、諸王を除いたという事実は②が女帝にとって譲りがたい意思であったと結論を出したい。

参考文献

- 瀧浪貞子『敗者の日本史 奈良朝の政変と道鏡』2013 吉川弘文館
中川収『奈良朝政治史の研究』1991 高階書店
北山茂夫『日本古代政治史の研究』1959 岩波書店
北山茂夫『女帝と道鏡』1969 中公新書
中西康裕『続日本紀と奈良朝の政変』2002 吉川弘文館
河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』1986 吉川弘文館
林陸朗『奈良朝人物列伝』2010 思文閣出版
勝浦令子『孝謙・称徳天皇』2014 ミネルヴァ書房
仁藤敦史『女帝の世紀』2006 角川書店
黒板勝美『新訂増補 国史大系 続日本紀 前編』1981 吉川弘文館
黒板勝美『新訂増補 国史大系 続日本紀 後編』1981 吉川弘文館

鏡
第73号

発行日：2020年2月25日

発行団体：龍谷大学歴史学研究会

Twitter：https://twitter.com/rekiken_ryukoku